『正親町帝時代史論―天正十年六月政変の歴史的意義―』第四章（岩田書院、2012年）

**「正親町帝と公家一統」**

一　室町時代における王権の推移

二　朝廷の政治加入とキリスト教伝来

三　正親町帝と禁教運動

補論６「正親町帝の新政と統一国家体制」

補論７「天皇の国家原理とキリシタン禁制」

補論８「信長の神格化問題再論」

※『織田・徳川同盟と王権―明智光秀の乱をめぐって』第四章（岩田書院、2005年）

（原章題「非象徴天皇正親町院と公家一統の夢」）

補論６～８章は、原題「正親町帝と｢覇者｣の類型―織田政権のモラトリアムと｢覇者｣の類型（下)」（『郷土文化』第６３巻第一号、名古屋郷土文化会、2008年）

本論文は、主査の中野等九州大学比較社会文化学府教授から厳重な査読を受けて、前著をより実証性を加味して博士論文として提出し、さらに一部補筆して発刊したものである。

《要約》

　　戦国期の後土御門、後柏原、後奈良の三代の天皇は、内裏の築地塀の修理ができず、天皇の遺骸を放置せざるをえないほど朝廷衰微は深刻な状態にあったが、正親町帝の代となって、その権威は大きく浮上した。

　これまで、それは他力本願的に考えられていたが、キリシタン追放、幕府に無断で改元するなど帝は政治介入を公然化させた。その根底に、強い危機意識を背景にした公家一統の政治を目指す思想が、帝を中心とする朝廷の一部で復活し、南朝回帰、王政復古の政治運動に発展していった。

1. 正親町帝は、慣例を破り幕府の了解を得ずに、永禄に改元し、将軍足利義輝を激怒

させただけではなく、幕府が認めたキリスト教の布教に強硬に反対し、自身の権限でこれを追放した。この事実などは幕府の統治権に対する侵犯である。

1. イデオロギー的にも、帝の側近三条西実澄は、信長に公家一統の政治を実現させると

している。正親町帝と推定できる極めて高位の人物が、公家一統を期待して、蘭奢待を信長に許す旨の書状があるなど、王政復古の政治思想は明確に存在した。

1. 帝は、朝山日乗を媒介に、松永久秀、毛利元就などから支援を受け、実態勢力として

政治介入を試みた。

1. 信長は、武家の統治権的支配権者として、帝と激しく対立し譲位を求めた。信長は、

帝の側近竹内三位を殺し、日乗を失脚させ、帝の弟が座主であった比叡山を焼き、帝に近い日蓮宗を追放したが、譲位は最後まで実現しなかった。

1. 信長は、譲位しない帝に対して、誠仁親王を擁立し、上下に御所を分断した。信長死

後、親王は事実上、失脚し、やがて頓死する。秀吉の代が始まると、朝廷は正親町帝に一元化された。

６．正親町帝は幕府を廃し、天皇と関白を一体化させて、公家一統の政治を秀吉によって

実現させた。本著が統一国家体制と呼ぶ豊臣政権（京兆政権や義輝政権、織田政権などは室町将軍を主従制的支配権者としているが、豊臣政権のそれは天皇を指す）は、武家を公家化して成立した王政復古の一形態であるとする。